

本報告書の要約

第1章 毎日の生活の様子

第1節 日ごらの生活

1. 生活時間（起床時刻・就寝時刻・睡眠時間）

「12時30ごろ以降」に就寝する割合は、小学生4.1%、中学生26.8%、高校生44.1%で、とくに学習塾や予備校に通う子どもでその割合が高い。高校生は起床時刻が早く、中学生は遅い傾向にある。高校生の2人に1人の睡眠時間は「6時間以内」であり、長時間学習している高校生は睡眠時間が少ない傾向もみられる（図1-1-1～3）。

2. 生活時間（テレビ・ビデオ（DVD）の視聴時間、テレビゲーム時間）

テレビ・ビデオ（DVD）を「3時間以上」見ている割合は、小学生23.9%、中学生28.8%、高校生16.7%で、中学生に多い。中・高生ではテレビの視聴時間と成績・高校偏差値層に関連がみられる。テレビゲームを長時間しているのは、中学生男子に多い（図1-1-4・5、表1-1-1）。

3. 学習時間（家での学習時間）

平日・休日とも家で学習をしない子どもたちは、学校段階が上がるにつれて増える。その一方で、平日・休日とも「1時間30分くらい以上」学習する子どもたちも、学校段階が上がるにつれて増えている。学習を「する」者と「しない」者との二極化が進んでいる。学習時間が少ないのは、女子よりも男子である。また、成績・高校偏差値層による差も大きく、学習時間は子どもたちの受験へのかかわり方とも大きく関係している（図1-1-6、表1-1-2～6）。

4. 学習時間（家や学校以外での学習時間）

「学習塾や予備校に行っている」「通信教育を受けている」などの学校以外の学習活動を聞いたところ、それらへの中学生の通塾・行動率が高い。「学習塾や予備校に行っている」のは、大都市、成績上位層、高校偏差値層の進学校生徒に多い。塾通いはおおむね週に1～2日程度である。1回の授業時間は、2時間程度が多い（図1-1-7、表1-1-7～10）。

5. 放課後の生活（平日の放課後の過ごし方）

小学生が「よく遊ぶ」場所は、「自分の家」「公園や広場など」「友だちの家」。小学生と比べ中・高生では「学校の教室」「ゲームセンターやカラオケ」「本屋やビデオ屋」で遊ぶ割合が多くなる（図1-1-8）。

6. 放課後の生活（ふだんすること）

小・中・高校生ともに「マンガや雑誌を読む」や「テレビのニュース番組を見る」ことが「よくある」＋「ときどきある」割合は7～8割台。「体を使って遊ぶ（スポーツなど）」や「家の手伝いをする」などは学校段階が上がるにつれて減少する。「本（マンガや雑誌以外）を読む」割合はどの学校段階でも5割台（図1-1-12）。

7. 経験していること

現代の子どもたちの生活、文化、社会経験は、女子のほうが多いものの、全体的にそれなりに豊富である。経験の内容によっては、地域や親との関係で経験に差がみられるものもある。総じて、経験したことの数が多いほど、成績がよく、社会への関心が高く、自らの将来についてのイメージも明確である（図1-1-13、表1-1-13～15）。

8. 部活動・アルバイト

中学生も高校生も、週の大半、1回2時間～2時間半程度と、かなり熱心に部活動を行っている。また、高校生の8割がアルバイト未経験者で、多くはなかった。しかし、大都市では気軽にアルバイトを経験する傾向がある（表1-1-18、図1-1-15）。

第2節 おこづかい

おこづかいは中1生で最も厳格に決まっている。お金の管理については、しっかりと管理しているのが多数派である。使い道では、学年が上がるほど欲しいものが増え、幅広い消費財にお金を使っている様子が見えてくる（図1-2-1～4）。

第3節 メディアとの接触

1. パソコンの利用（1）

子どもたちの4割以上が「週に1日以上」パソコンを利用している。ただし、利用しても、「週に1～2日」が多い。パソコンを使う場合、家での利用が学校よりも多い。家での利用が多いのは中学生で、学校での利用が多いのは高校生である（図1-3-1・2）。

2. パソコンの利用（2）

パソコンの利用内容は、学校段階によって、違いがある。小学生は「ゲーム」を中心とした使い方をする。中・高生は「インターネットで趣味や遊びのことを調べる」ことを中心とした使い方をする。パソコンについては、どの学校段階においても、「パソコンをもっと使いこなせようになりたい」「パソコンを使うのが楽しい」という回答が多い（図1-3-3・4）。

3. 携帯電話の利用（1）

携帯所有率は、学年が上がるにつれて、その割合も増える。とくに高校生では9割以上が所有している。どの学校段階においても、男子よりも女子の所有率が高い。また、小・中学生では、中都市・郡部と比べて、大都市の所有率が高い。1日に携

携帯電話を使ってすることは、小学生は「家族にかける電話」が多く、中・高生は「友だちに送るメール」が多い（図1-3-5・6、表1-3-3・4）。

4. 携帯電話の利用（2）

携帯所有者に、携帯電話について思うこと、あてはまることをたずねると、どの学校段階においても、「携帯電話がないと今の生活が不便になると思う」「携帯電話を使うのが楽しい」と感じている。中・高生では、「何もすることがなくなると、すぐに携帯電話を見ってしまう」「電話やメールがこないときさみしくなる」といった回答が多くなる。携帯電話が生活に浸透している結果であると同時に、携帯電話に依存した生活が強くなっていると解釈することもできる（図1-3-7）。

第2章 自分自身をとりまく人間関係

第1節 周囲とのかかわり

1. 親子関係

親子の会話は母親が中心で、父親との会話はその半分程度であるが、中・高生になると父親が煙たくなり、とくに友だちのことは話さなくなる。親と話さないのは中2生がピークであるが、成長とともに会話はまた増える（図2-1-1・4）。

2. 友だち関係・異性関係

15%程度の子どもの悩みごとを相談できる友だちがいない。小学校高学年は友だちと同質でいようと緊張し、中学生ではギャング的な友だち関係を形成し、高校生は異質性を認め自立的な方向に向かい始める。異性交友については、女子のほうが男子よりやや早熟な傾向がうかがえる（図2-1-14・17・18・21・22）。

第2節 自分について

1. 自分自身について

7割の子どもが、ルールを守り自律性をもつといった肯定的な自己像をしっかりと持っている。一方で、落ち込みやすいなど情緒の不安定さは、年齢が上がるとともに増え、とくに女子にその傾向が顕著である。いいことをしたときほめる親の子どもは、自分について肯定的になり、情緒も安定しやすいようである（図2-2-1～4）。

2. 食事の様子

母親の就労形態にかかわらず、8割以上の家庭で子どもは朝食を食べている。しかし、学年が上がるにつれて食生活は大きく変動し、個食・孤食も高校生では3割に達する。食事に対しては受験といった大きなストレスや、性差の影響が大きいようだ（図2-2-5～8）。

3. 生活の満足度

友だち、家族、身の回りの社会など身近なものに満足している子どもは7割と高い割合でみられるが、自分自身については不満をもつ子どもが多い。また日本社会への不満も、中・高生で多くなる。基本的な生活習慣がしっかりしている子は、満足感の高い子が多い（図2-2-9～12）。

第3章 学習について

第1節 学習の様子

1. 得意なこと・苦手なこと

どのようなことが得意（苦手）であるかを子どもにたずねた。小学生は、中学生や高校生に比べて得意とすることが多く、有能感の高いことがわかった。性別では、男子は考えることが、女子は楽器を演奏することや物を作ることが得意であった。また、考えることが得意な子どもほど、成績もよいことが明らかになった（図3-1-1・4、表3-1-1）。

2. 勉強する理由

勉強する理由、さらにそれと成績との関係を調べた。勉強する理由では「問題が解けるとうれしいから」や「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」といった肯定的な理由と「小学生（中学生・高校生）のうち勉強しないといけないと思うから」や「勉強しないと頭が悪くなるから」といった否定的な理由が多くの子どもに認められた。成績との関係では、肯定的な理由で学ぶのは、成績上位層の子どもである傾向が明らかになった（図3-1-5～8）。

3. 学習の取り組み方

中・高生は学習の取り組み方についての後悔や悩みを抱えている割合が高く、とくに小6生から中1生にかけてその割合が急増する。また、学習の取り組み方と成績については、関係性があることが明らかになった（図3-1-9～11）。

第2節 将来展望

1. 進学希望（小学生の中学受験を含めて）

小学生の4人に1人以上、中学生の2人に1人ほどが「大学（四年制）まで」「大学院（六年制大学を含む）」への進学を希望している。男子が女子より、四年制大学進学を希望しやすい。他方、小学生の3割弱、中学生の2割弱が、進路を「まだ決めていない」と回答し、小・中学生の2割前後は「高校まで」と回答している。高学歴志向が一層定着して、中学受験をする小学生も1割を上回る（図3-2-1・2、表3-2-1）。

2. 将来の職業について（1）

将来、なりたい職業が「ある」と回答する子どもは、小・中・高校生で大きな差

はなく、平均して6割台である。「ある」という者のうち、「どうしたらその職業につくことができるのかを調べることがある」者は、高校生が8割強なのに対し、中学生は6割、小学生は5割。一方、「その職業につくために努力していることがある」者は、高校生が6割弱にとどまるのに対し、中学生は6割、小学生は7割弱と高くなっている（図3-2-3～5）。

3. 将来の職業について（2）

実際に将来なりたい職業にあげられているものの第1位は、小・中学生の男子で「野球選手」、女子で「保育士・幼稚園の先生」。高校生になると、男女とも「学校の先生」である。小学生の職業へのあこがれが、中・高生になるにつれて、しだいに現実的で安定した職業へと変わっていく（表3-2-2～4）。

4. 将来の職業について（3）

なりたい職業が「ある」という子どもをみると、小学生では成績上位層が高い割合を示すが、中・高生になるとほとんど差はなくなる。他方、職業について「どうしたらその職業につくことができるのかを調べることがある」「その職業につくために努力していることがある」者は、小・中学生では成績上位層、高校生では進学校の生徒に多い。その背景に、高い進学希望が認められる。また、なりたい職業が「ある」子どもは、家庭でも将来や進路のことをよく話している（表3-2-5～7）。

5. 将来の職業について（4）

中・高生に、職業の選択において重視することをたずねると、学校段階・学年による差はあまりなく、「自分の好きなことが生かせる」「安定していて長く続けられる」割合が高くなって、6割から7割前後におよぶ。「休みが多い」「大きな会社である」については1割前後と、あまり重視されない（図3-2-6・7）。

第3節 学習の様子と親子関係

1. 学習時間と親子関係

学校段階を問わず、親との会話が多い子どものほうが、少ない子どもより、家での学習時間が長い。平均時間でみると、15分程度の違いがある。また、親との会話量別に、家での学習を「ほとんどしない」割合をみると、中2生や高2生でその差が大きい（図3-3-1・2）。

2. 学習の取り組み方と親子関係

どの学校段階でも、親との会話が多い子どものほうが、少ない子どもよりも、知的好奇心や学習意欲などが高い。しかし、学習方法へのとまどいは、小学生では親との会話量による差がみられるものの、中・高生になるとあまり差がみられない。また、学習に対する後悔については、どの学校段階でも親との会話量による差がほとんどみられない（図3-3-3～9）。

3. 勉強する理由と親子関係

親との会話が多い子どものほうが、少ない子どもよりも、勉強することにさまざまな理由や目的を見いだしている。とくに勉強に対するポジティブな理由においてこの差は大きい（表3-3-1～3）。

第4章 学年別にみる生活の特徴

第1節 小学生

1. 小学4年生

小4生は、比較的、規則正しい生活を送っている。早寝早起きの習慣が身につく、短時間ではあるがきちんと家庭学習をしている子が多い。親子関係をみると、肯定的なかかわりが中心である。しかし、その一方で友だち関係の緊張感が高く、「話が合わないと不安」といった思いを強く抱いている。

2. 小学5年生

家庭学習時間はわずかに長くなるが、学習に対する肯定的な意識が弱まり、否定的な意識が強まる。この傾向は、中学生まで継続する。生活面では、テレビ視聴やテレビゲームの時間の増加や、「マンガや雑誌を読む」が増えるなど、娯楽文化に接する機会が拡大する様子がみられる。思春期にさしかかる学年であるが、親子関係は悪くない。

3. 小学6年生

親子関係で肯定的なかかわりや会話が減少したり、友だち関係や先生との関係の満足度が低下したりするなど、人間関係の難しさが表れる学年である。家庭学習時間は大きな変化がないが、意識面では学習に対する否定的なとらえ方が増大する。睡眠時間の減少、テレビ視聴時間の増加は、小4生から継続して進行する。

第2節 中学生

1. 中学1年生

中1生は学習面での変化が著しい。平日の家庭学習時間では、「ほとんどしない」という回答が23.5%にまで拡大し、およそ4人に1人の割合になる。学習に対する否定的な意識も増大し、学習意欲の低下、学習目的の喪失、学習方法がわからない悩みなどの増大がみられる。

2. 中学2年生

学習面では高校受験を意識しはじめるものの、実際の家庭学習の時間は少ない。平日、家庭では学習を「ほとんどしない」という比率が27.3%に達する。それに対して、長時間テレビを見たり、テレビゲームをしたりする子が多い。親子関係では、肯定的なかかわりが減少し、会話量も減る。友だちとは携帯電話やパソコンを通じたコミュニケーションが増える。

3. 中学3年生

高校受験が生活や学習のさまざまな面で影響を与える学年である。就寝時刻が遅くなり、睡眠時間が減少するとともに、学習時間は大きく増える。3人に1人が、「2時間以上」学習すると回答している。親子の間でも、成績や進路の話題が増える。受験を意識するためか、新聞を読む、ボランティアをするなどの比率が高まる。

第3節 高校生

1. 高校1年生

高校入学とともに、遊び場などの行動範囲が広がる。友だちの数も増え、携帯電話を友だちとのメールに活用している。学習時間は二極分化の傾向を示し、学習しない生徒と長時間学習する生徒の両端が増える。親とのかかわりは、関係の悪かった中学時代から改善する様子が見られる。

2. 高校2年生

学習時間の二極化の傾向は高1生から変わらず、ほとんど学習しない生徒も長時間学習する生徒も小・中学生と比べると多い。意識面では、大学受験ややりたい職業など、将来を見ずして学習しようとする傾向が強まる。親との会話でも、将来や進路の話題が増える。携帯電話については、使い慣れてくるためか、依存的な使い方をする傾向が弱まる。